

令和7年度 市川市文学ミュージアム企画展

昭和のテレビドラマ 脚本家 水木洋子のエッセンシャル

テレビドラマは日常の
延長線上でした。



「竜馬がゆく」放送終了を記念して贈られたアルバムより

目次

ご挨拶 凡例

第一章 水木洋子 テレビドラマへの変遷

テレビの歴史

日本のテレビ放送のはじまり

水木洋子とテレビドラマ

コラム 伊馬春部

第二章 水木洋子のエッセンシャル 徹底した取材

水木の徹底した取材「嵐」

取材により反映された白鳥「幼い二人」

苦労した取材の先に「竜馬がゆく」

コラム 和田勉・水木洋子とたばこ

第三章 水木洋子のエッセンシャル 家族へのまなざし

水木洋子 ホームドラマのエッセンシャル「星の夜のテラス」

水木洋子が描く〈世代差〉「豆菊はんと雛菊はん」 「こぎとゆかり」

コラム ミヤコ蝶々

水木洋子が描く〈家〉という呪縛「甘柿しぶ柿つるし柿」 「はまなすの花が咲いたら」

水木洋子が描く〈女性と仕事〉 「もず」 「みかんきんかん夏みかん」

25 23 22 19 17 16 15 13 11 9 8 7 6 5 4 3 2 1

第四章 そのほかのテレビドラマ

「女人平家」

コラム 吉屋信子

コラム 水木洋子出演番組

テレビドラマから映画へ

ドラマ上映会作品「五月の肌着」「灯の橋」「女が職場を去る日」

あの頃、夢中になったテレビドラマ

展示資料一覧

水木洋子のテレビドラマ作品一覧

28

29

30

31

32

33

35

36

37

凡例

- 本図録は、令和7年度市川市文学ミュージアム企画展「昭和のテレビドラマ 水木洋子のエッセンシャル」の展示内容に基づいて構成した展示図録です。
- 本図録は会期後に作成したものです。
- 引用文中には今日の観点からみした場合、不適切な語句や表現がありますが、原文の文学性、歴史性を考慮し、そのままとしました。
- 敬称は省略させていただきました。
- 著作権については極力調査しましたが、お気づきの点がございましたら、ご連絡ください。
- 本図録に掲載されている資料は全て当館所蔵のもので、写真、文章を許可なく転載することは禁止いたします。

「ご挨拶」

日本映画の黄金期、女性脚本家の草分け的存在であった水木洋子はテレビというメディアを早くから評価していました。そして、1957年から1981年までに約50作品のテレビドラマ脚本を手がけました。

本展では、台本、直筆原稿やメモ、取材資料、書簡などを通して、日本のテレビ史、水木の脚本術などを紹介、水木の新しい魅力に迫ります。テレビが情報や娯楽の中心であった昭和の時代に水木がどのような脚本を書き、何を伝えたかったのかを感じていただければ幸いです。

最後になりましたが、本展の開催にあたり多大なるご協力を賜りました関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

第一章 水木洋子テレビへの変遷

テレビの歴史 (1981年まで)

1926

- テレビ実験で「イ」の字を映し出すことに成功



1953

- テレビ本放送開始
街頭テレビでプロレスや野球を観戦

1955

- 神武景気により消費が拡大
「三種の神器」として白黒テレビ、冷蔵庫、洗濯機が憧れに

1957

- 水木洋子がテレビの脚本を書き始める

1959

- 皇太子のご成婚をテレビで見ようと、
テレビの普及率が倍増



1960

- カラー放送開始

1964

- 東京オリンピック開催
オリンピック史上初めて中継放送され、
大会の様相がお茶の間に

1966

- カラーテレビが本格的に普及し始める

1970

- 日本万国博覧会(大阪万博)からの中継などにより、
カラーテレビが人気に



1975

- ほぼすべての家庭にカラーテレビが普及

1981

- 水木最後のテレビドラマ
脚本作品が放送される

日本のテレビ放送のはじまり

1939年、NHK（日本放送協会）が日本初のテレビ実験を実施した。翌年に伊馬鶴平（いまうへい・のち春部）脚本の12分のドラマ「夕餉前（ゆうげまえ）」が実験放送され、1953年には本放送が開始。受信機が高価だったため、街頭に設置されているものを見る人がほとんどで、プロレスや野球などのスポーツ中継には観衆が殺到した。

それまでほとんどの番組が生放送だったが、1958年にVTR（ビデオテープ・レコーディング）が導入されると、収録が徐々に増えていく。

1960年にはカラー放送が本格的に始まり、スポーツやバラエティ番組を中心に放送された。初期のカラードラマはホームドラマが多く、ほとんどが生放送で、ハプニングが続出したという。

元々人気だったホームドラマ、刑事ドラマ、時代劇が盛んに放送された1970年代には、ほぼすべての家庭にテレビが普及し、テレビが最大の娯楽となった。



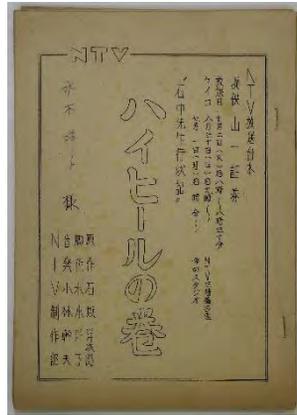
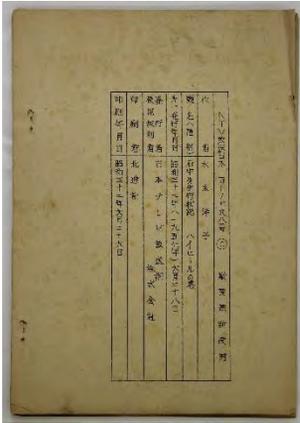
お茶の間でテレビを見る家族 1959(昭和34)年

水木洋子とテレビドラマ

映画「純愛物語」「浮雲」などの脚本家として知られる水木は、1947年から市川市八幡に住まい、数々の名作を生み出した。テレビが出現した早い時期からテレビの力を評価していた水木は、生放送からVTRへ、白黒からカラーへと移り変わっていったテレビ放送の変遷のなか、徹底した調査や取材をもとに、「早春」（1957）から「はまなすの花が咲いたら」（1981）までの24年間、約50作品のテレビドラマの脚本を書いた。



「竜馬がゆく」の記念パーティーで水木が着用していた着物



「石中先生行状記 ハイヒールの巻」台本

1957(昭和32)年放送 NTV

日本のテレビ放送初期に水木が脚本を担当した作品。表紙には放送日と稽古日が記載されており、生放送であったことを感じさせる。台本の発行は6月28日。台本ができてから放送日までわずか5日間だった。

【水木洋子】みずき ようこ

本名 高木富子(たかぎ とみこ) 1910～2003
東京市京橋区(現・東京都中央区京橋)生まれ

おそらく時代は進んでもテレビが映画のように制作日数をかけ、N・Gを用意しながら厳密な好条件のみをフィルムに記録するようなシステムにはならないと思うのである。そこにテレビの新らしい時間芸術としての制約があり、それが面白いのである。舞台劇は興業期間の修正がきくし、それよりもテレビの成果は瞬間的なものである。腹を抱えるような失策も、アツという間に起り得る素地をもっているところにテレビの特色がある。また名プレイを見るようにその瞬間でなければ二度ととらえ得ない表現も、テレビだけがもつ可能性だと思う。これは計算だけでは生れない芸の本質である。

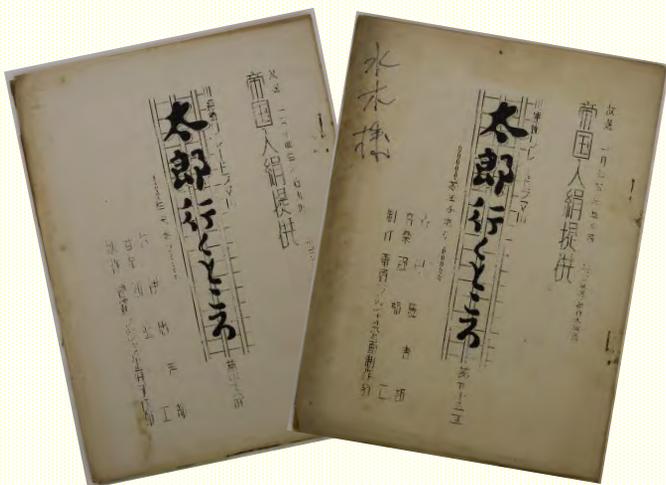
「テレビの場合」『放送ドラマ』清和書房

(1959(昭和34)年10月)

コラム 伊馬春部

水木洋子と伊馬春部

1955年に放送されたラジオドラマ「太郎行くところ」で脚本を共作。1975年、国立劇場で「明治一代女」が公演された際の対談では、新派との出会いや魅力について語り合った。



伊馬春部「太郎行くところ 第45・46回」台本

1955(昭和30)年放送 ニッポン放送・新日本放送
飯沢匡(ただす)、伊馬春部、八木隆一郎、水木洋子、堀江史朗が2回ずつ執筆した連続リレー放送劇(ラジオ)の台本のうち、伊馬春部が脚本を担当したもの。



国立劇場 第四回 六月新派公演

1975(昭和50)年6月
水木・伊馬の対談「新派〈野鳥〉の説」が所収されている。

【伊馬春部】 いまはるべ

旧筆名 伊馬鶴平(いまうへい)
本名 高崎英雄(たかさき ひでお)
1908～1984

福岡県鞍手(くらて)郡(現・北九州市八幡西区)生まれ

1932年にムラン・ルージュに参加し、新喜劇の脚本を書き始める。1940年、国内初のテレビドラマ「夕餉前」の脚本を担当。戦後、ラジオドラマ「向う三軒両隣り」などの脚本を務めた。

第二章

水木洋子のエッセンシャル

徹底した取材

水木の徹底した取材「嵐」

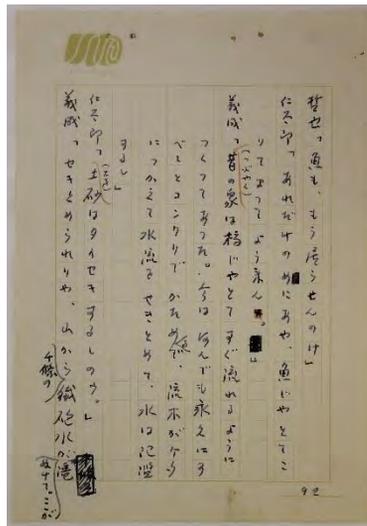
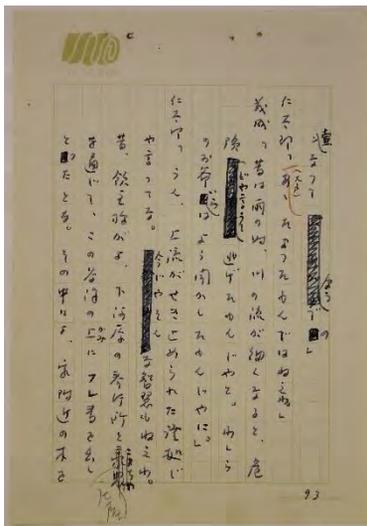
1961年に長野県伊那谷(いなだに)を集中豪雨が襲った。その翌年、水木は押し流された山村を取材。手帳には水害の歴史や原因、被害の状況などが記され、被災した小学生の文集や水害体験談集には、参考にしたと思われる箇所印が付いている。自分の目で確かめた現場、取材や調査で知り得た知識、被害者の声は、治水問題を訴えるドラマ「嵐」の脚本に反映された。



集中豪雨で押し流された伊那谷の家を見学する水木
1962(昭和37)年ごろ

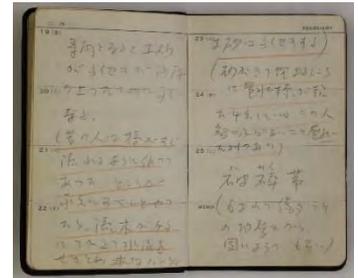


住民に取材する水木 1962(昭和37)年ごろ



「嵐」原稿

取材メモが反映されているセリフ。



「なぎ」取材手帳

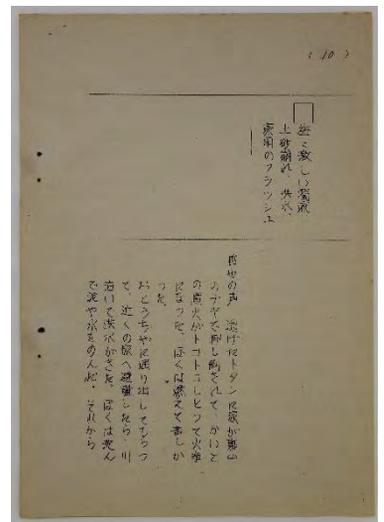
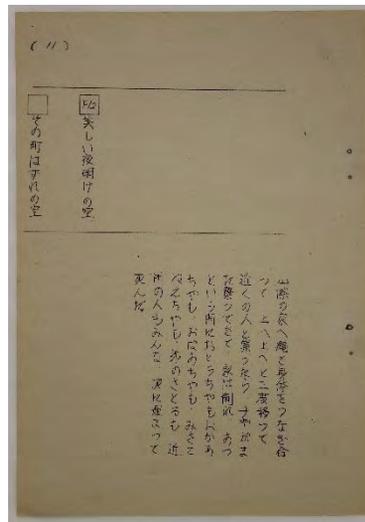
(昔の人は橋がすぐ／流れるように作って／あった。ところが／永久にすべしとやっ／たら、流木がケタ／につかえて水流を／せきとめ水はハンラン／土砂はタイセキする)



集中豪雨で押し流された伊那谷 1962(昭和37)年ごろ

『嵐』：集中豪雨などにより、山肌がなぎ倒されたように崩れ、土砂を押し流すことをさす、中部山岳地帯で用いられる山言葉。「嵐」は作字。

嵐(なぎ)
 1962年11月30日放送 NHK
 演出 館野昌夫
 出演 田村達也・宮口精二・中村芝鶴 ほか
 集中豪雨で堤防から水が溢れ、村が破壊された。孤児となった哲也の視点から、水害と治水、残された村の人々の様子をリアルに描いたドラマ。当時の困難な撮影状況の中で、豪雨のすさまじさを出すのにスタッフが苦労したという。



『嵐』第2稿台本

1962(昭和37)年放送 NHK

取材で得た災害の様子が反映されているシーン。



『わたしはひとりになった 伊勢湾台風子どもの記録』

1960(昭和35)年 三重作文の会事務所

『嵐』全体を通した被災者側の視点には、怒りや悲しみと同時に冷静さがある。まえがきには線が引かれており、作品を作る際に参考にしたことがうかがえる。

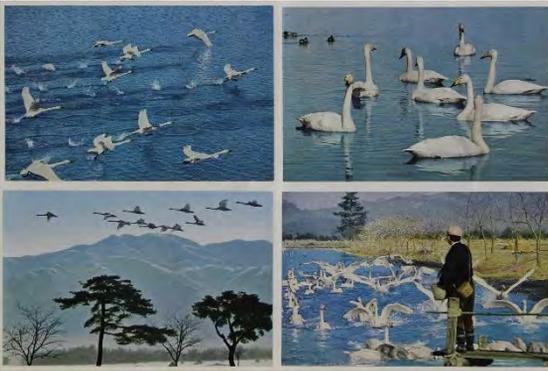
取材により反映された白鳥「幼い二人」

水木は新潟県の小千谷（おぢや）や水原郷（すいばらごう）を取材。手帳や資料などからは、白鳥が渡来する季節に防寒して取材に挑む水木の様子がうかがえる。

このドラマでは「餌に集まる白鳥」や「飛び立つ白鳥」など白鳥のシーンが多く、87のうち31シーンに白鳥が映っている。



小千谷で取材する水木 1965(昭和40)年



ひょうこ
「瓢湖の白鳥」写真はがき 水原郷観光協会



「山嵐」第17回芸術祭受賞記念 絵皿

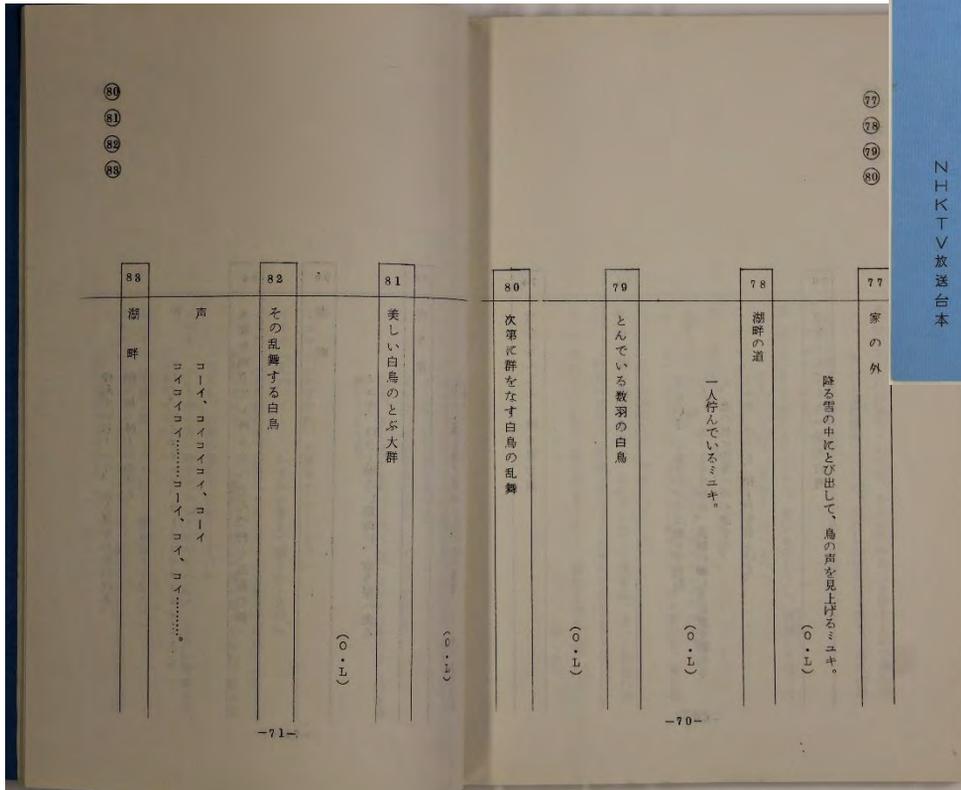
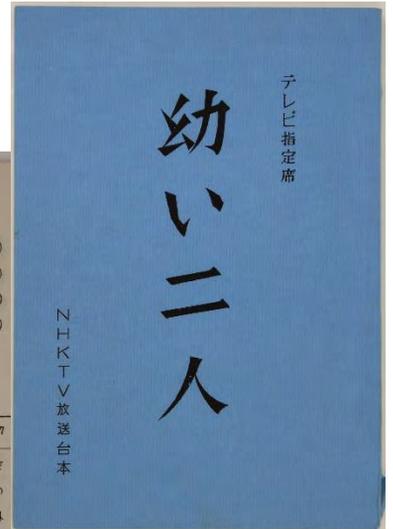
幼い二人

1966年8月20日放送 NHK

演出 都成潔

出演 森崎俊雄・寺田農・小林妙子 ほか

ミユキは5歳のころ、湖で溺れていたところを少年イサクに助けられる。10年後、村を去ったイサクと思われる少年と出会ったミユキは、伝統の機織りを受け継ぐことを決意する。白鳥の舞う湖畔を舞台とした少女の成長物語。



「テレビ指定席 幼い二人」台本

1966(昭和41)年放送 NHK

セリフがなく、白鳥の描写が続くシーン。



「Prix Italia 1966 Osanaï Futari The Little Ones」台本

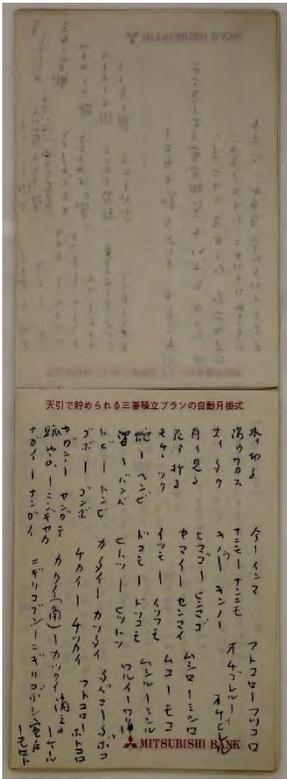
1966(昭和41)年放送 NHK

イタリア放送協会が開催する国際番組コンクールである Prix Italia (イタリア賞) に、1966年に出品した際の台本。英訳と仏訳されたものが記載されている。

苦勞した取材の先に「竜馬がゆく」

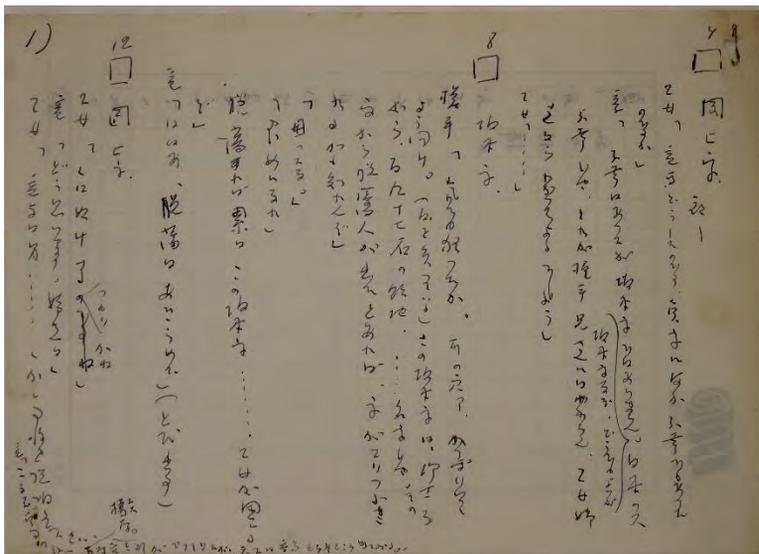
水木がNHKから時代劇の脚本依頼があったのは「竜馬がゆく」の映画化が中止になった2、3年後のこと。少女時代に初めて書いた戯曲が竜馬の寺田屋騒動だったため、NHKの企画が「竜馬がゆく」に決定したとき、竜馬に特別な縁を感じたという。

「テレビの竜馬像は類型的」と失望していた水木は、女性から見た本当の竜馬を描こうと力を入れて取り組んだ。現地を訪れ、時代考証や史実調査を行い、毎週原稿を送る作業は約1年続いた。58歳の水木にとって過酷な仕事だったが、史実と方言に忠実な、大河ドラマにふさわしいドラマ性のある作品となった。



「竜馬がゆく」取材メモ

土佐弁について取材したメモ帳には、家族の呼び方や罵り言葉などの方言が細かく記録されている。「竜馬がゆく」では土佐弁が多用されていることから、脚本制作にこの取材が役立ったことがうかがえる。



「竜馬がゆく 第16回」構想メモ

「竜馬がゆく」の中で映像が現存している唯一の回の構想メモ。



「竜馬がゆく」関係人物取材メモ

坂本龍馬の親族や関係の深かった人物の調査メモ。

竜馬がゆく

1968年1月7日～12月29日放送（全52回） NHK

原作 司馬遼太郎

演出 辻元一郎・和田勉（第4回から）

出演 北大路欣也・浅丘ルリ子・加東大介 ほか

幕末の動乱の中に自らの身を挺し、日本の夜明けを呼んだ風雲児・坂本竜馬の剣術修行時代から、薩長同盟を成功させながらも暗殺されてしまうまでの短くも波乱に満ちた生涯を描いたドラマ。

1963年から始まったNHK大河ドラマの6作目にあたり、最後のモノクロ作品。NHKは明治100年を意識して、「三姉妹」に続き「竜馬がゆく」を取り上げた。司馬遼太郎のNHK大河ドラマ初作品。

原作は史実をはじめ克明に人物を活写されている。私が一読者で終わるならそれだけでいい。しかしそれはまだ私の仕事の性質上、すべてをハダで感じた上ででないし立ちあがれないからである。観念でつかんだだけではドラマにならない。ストーリーという素材をならべて見せたただけでは困りものである。

「竜馬と私」『グラフNHK』NHKサービスセンター（1967（昭和42）年12月15日）



「竜馬がゆく」台本
1968(昭和43)年放送 NHK

コラム 和田勉

水木洋子と和田勉

水木はテレビドラマ「なぎ」の試写を見て感動したという和田から手紙をもらい、このころから2人の交流は始まった。「竜馬がゆく」以降、水木は和田に励まされながら、「出会い」「星の夜の雨傘」の2作のオリジナルドラマを書き上げた。

【和田勉】 わだ べん

本名 和田勉(わだ つとむ) 1930(2011)
三重県松阪市生まれ

1953年NHK入社。「石の庭」(1957)「日本の日蝕」(1959)などを演出する。芸術祭大賞を受賞したドラマ「天城越え」(1978)など、数々の受賞作品を生み、「ドラマのワダベン」「芸術祭男」の異名をとった。クローズアップを多用した独自の演出など、映像や音の表現技法を重視したことで知られ、俳優の育成にも定評がある。

コラム 水木洋子とたばこ

水木は喫煙家で、仕事が忙しいほど、よくたばこを吸っていた。しかし「竜馬がゆく」の執筆をきつかけに、頭の疲れよりも煙の疲れで一日を終えていることに気が付き、吸わなくなった。



映画「あれが港の灯だ」の打合せ中に喫煙する水木



水木が使用していたと思われる
煙草入れと灰皿

第三章

水木洋子のエッセンシャル

家族へのまなざし

水木洋子 ホームドラマのエッセンス 「星の夜のテラス」

ゴッホの「夜のカフェテラス」からインスピレーションを受けて書いた作品。水木の作品の特徴である、年老いた母と自由になりたい娘の複雑な関係を中心に、核家族の様子や戦後生まれの若者の描写など、水木のホームドラマには欠かせない要素が取り入れられている。

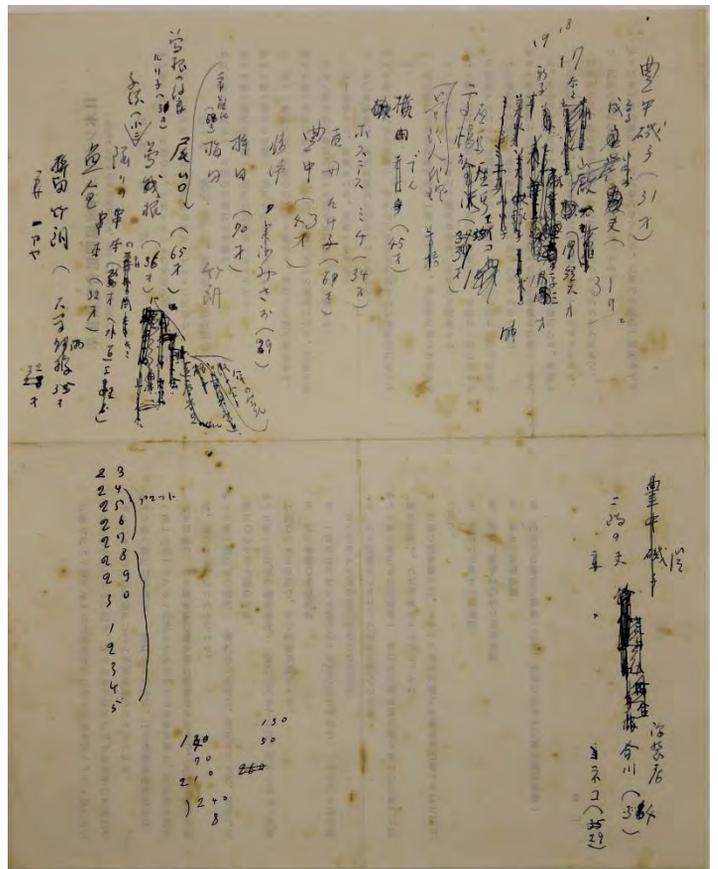
星の夜のテラス

1970年6月27日放送 NHK

演出 小林利雄

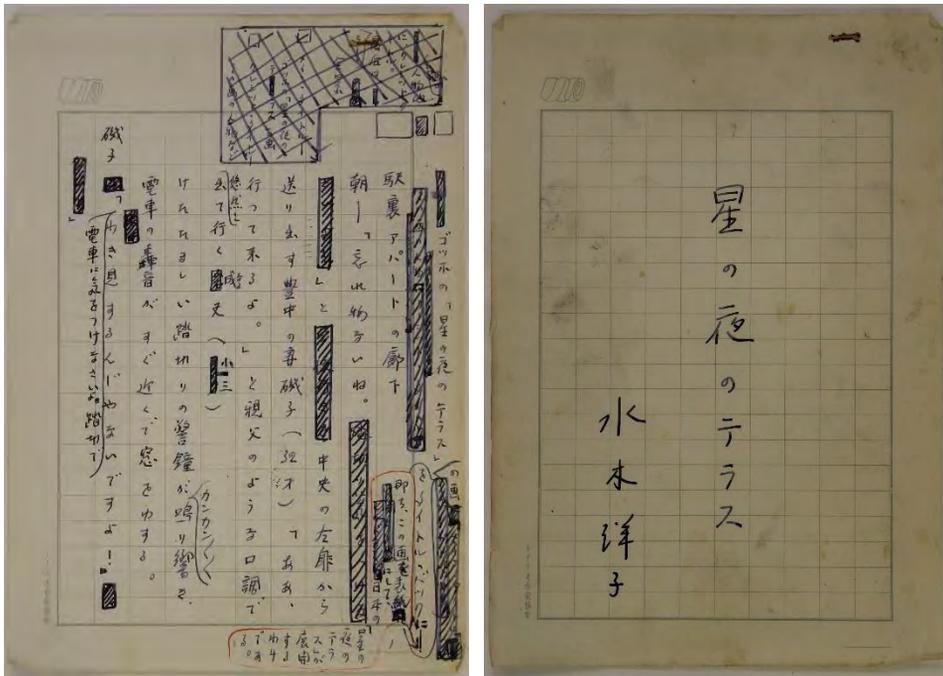
出演 池内淳子・吉行和子・芥川比呂志 ほか

とあるアパートで暮らしている主人公・横田でんは、アパートの住人たちが巻き起こす騒動にいつも巻き込まれている。アパートの住人同士の交流を軸に、さまざまな家族の形を描いた作品。



「星の夜のテラス」登場人物メモ

登場人物が書かれたメモ。人物をさまざまな職種・年齢に設定している過程がわかる。水木のホームドラマの要素がここからも読み取れる。



「星の夜のテラス」原稿

原稿の1枚目。ゴッホの「星の夜のテラス」の画をタイトルバックでどのように使うか修正を重ねている。

豆知識 日本のホームドラマ

ホームドラマとは、家族や家庭内の出来事をテーマにしたドラマのこと。時代背景とともに日本のドラマは変化していった。

◆1940年 日本初のテレビドラマ「夕餉前」放送。

◆1955年〜 家族の様子を映したホームドラマだったアメリカのホームドラマの影響を受けた核家族のホームドラマが制作される

◆1960年 初めてカラードラマが放送される

このころ時代劇や刑事ものとは違い、動きが少ないホームドラマが初期のカラードラマとして多く制作される

◆1965年〜 1955年から続いた核家族のホームドラマに対する反動で、大家族のホームドラマが多く制作される

◆1975年〜 家族のディスコミュニケーションや家庭の崩壊などが描かれるようになる

その後、ホームドラマはサブジャンルと混合する形で放送されていった

水木洋子が描く〈世代差〉

「豆菊はんと雛菊はん」「こぎとゆかり」

水木は「豆菊はんと雛菊はん」で、年配者の視点からみた世代による結婚観や感性などのギャップを、皮肉やユーモアを交えて描いた。

一方、「こぎとゆかり」では、若者の理想の人生を送りたい気持ちと老人を愛おしむ感情との葛藤を表現している。

水木は世代による隔たり、それによって生じる苦悩など、世代差による社会の問題を、ホームドラマを通じて伝えた。

ハムサムでスポーツウマンやて聞いてましたやろ？チョンチョコリンでけったいな……。よっぱど脳外科の方が、比較にならしまへんえ。

「豆菊はんと雛菊はん」

豆菊はんと雛菊はん

1965年1月3日放送 NHK

演出 前田達郎

出演 京マチ子・ミヤコ蝶々・山吹まゆみ ほか

舞妓である雛菊と豆菊には、過去にお客をめぐつてのいさかいがあった。その後、雛菊と豆菊はそのお客の娘である昭子をめぐつて再びいがみ合うことになる。二人が用意した昭子の結婚の準備は、昭子の駆け落ちで破綻し、いがみ合っていた二人は仲直りをする。

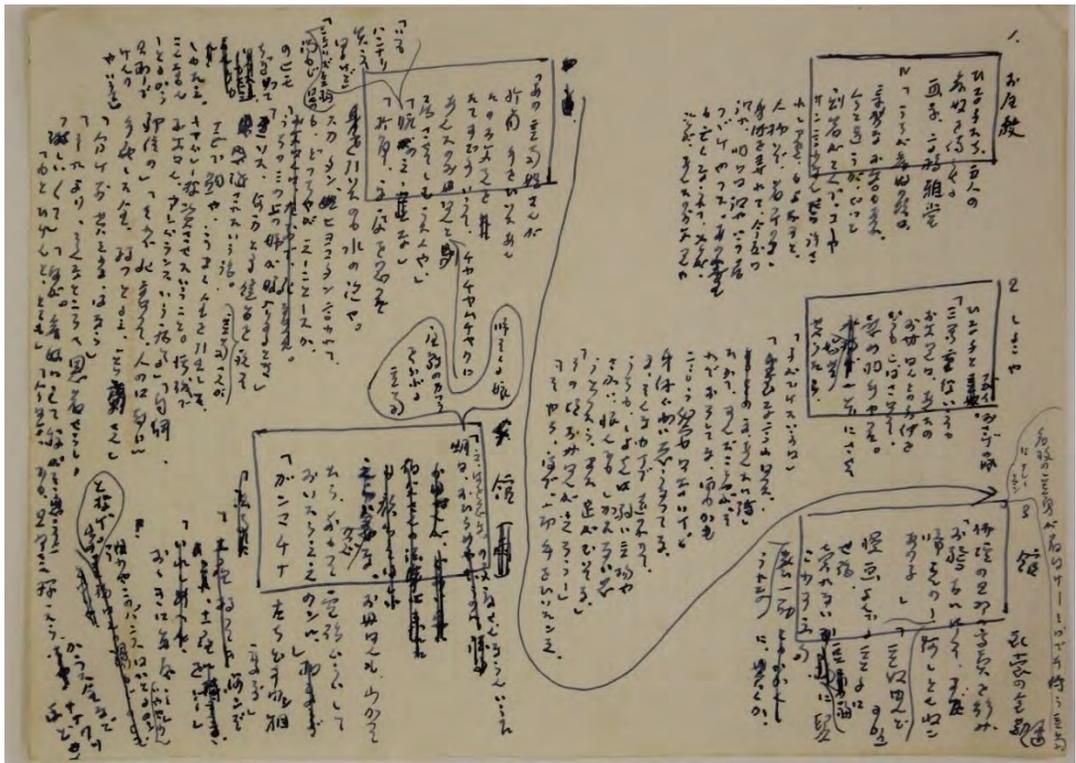
こぎとゆかり

1978年11月12日放送 CBC

演出 住田明美

出演 大原麗子・北林谷栄・永島敏行 ほか

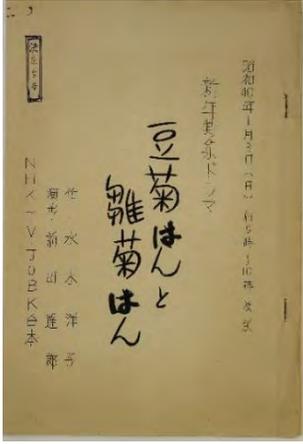
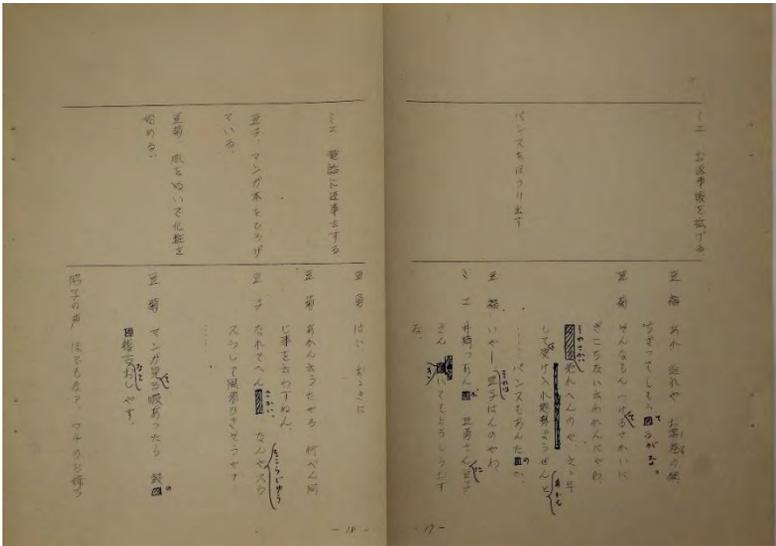
こぎは孫娘のゆかりに連れられて東京から犬山の明治村見物に出かけた。そこで、ゆかりは偶然ペンフレンドの高山と出会う。一方、こぎは老人の武夫と知り合う。二手に分かれて見物を始めた老若2組は、それぞれ心潤う半日を過ごす。しかし、夕暮れになってもこぎと武夫が帰ってこない。



「豆菊はんと雛菊はん」箱書き

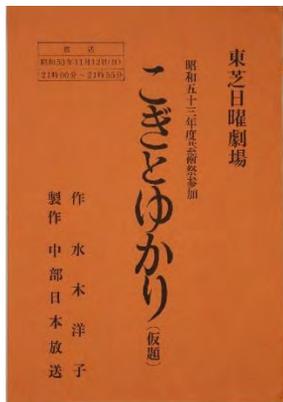
箱書きの段階からすでに、多くのセリフを書き込んでいることがわかる。

箱書き：水木が構成を考える際に作っていたもの。これにより、シーンの無駄や画面の展開が一目瞭然となり、構成の計算が綿密にできるという。



「新年特集ドラマ 豆菊はんと雛菊はん」決定台本

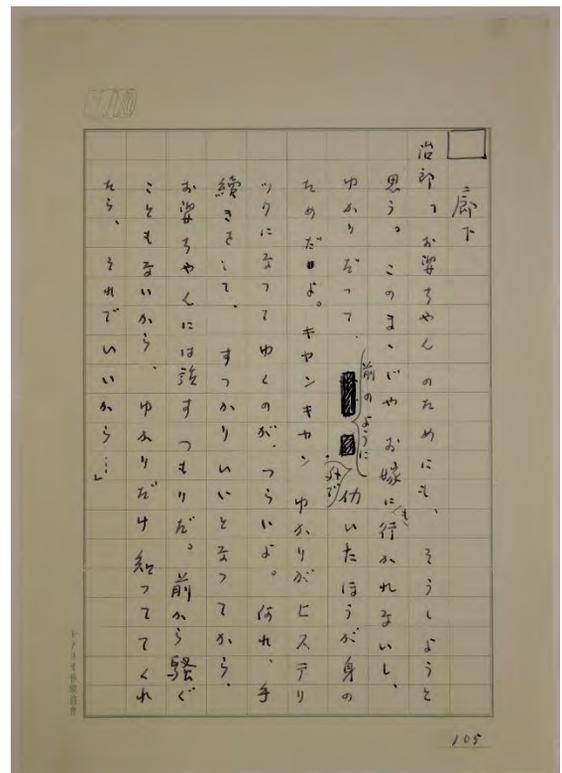
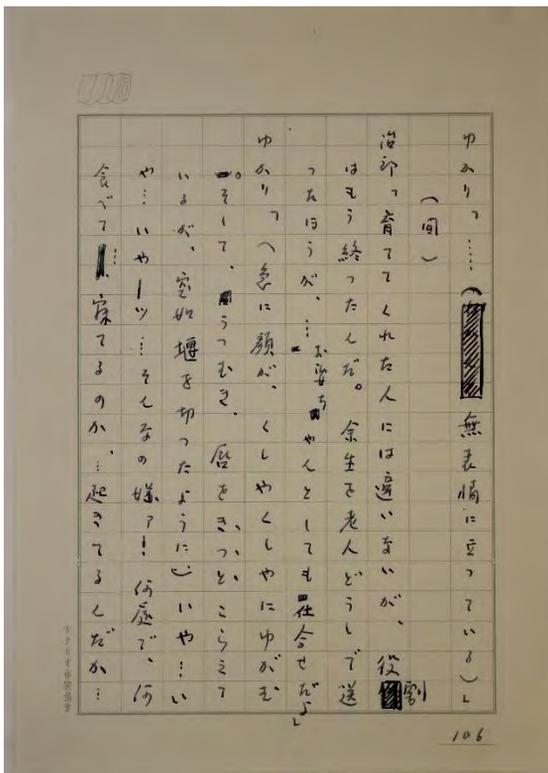
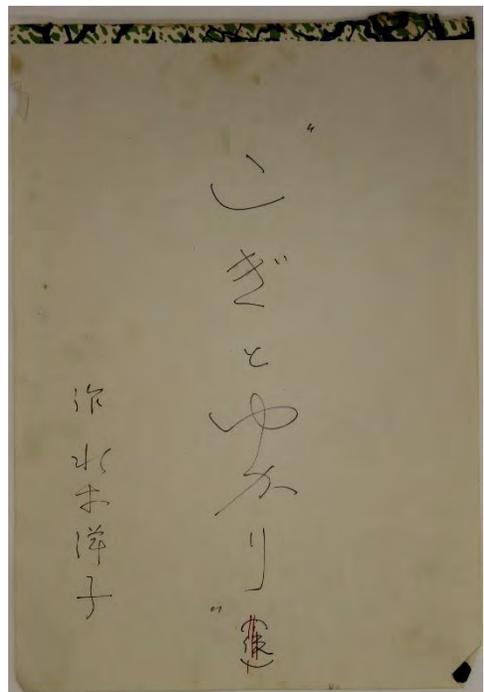
1965(昭和40)年放送 NHK
 修行中である若い舞妓のだらしない様子を年配者である豆菊が叱っているシーン。
 *お湯巻：女性の腰巻のこと。
 *パンス：髪留め、ヘアクリップのこと。



「東芝日曜劇場 こぎとゆかり（仮題）」台本

1978(昭和53)年放送 CBC

台本にある「企画意図」には、「これは、どの街にも、どの家庭にもある逸話の一篇をドラマの形をかりて、身近な人間の今日社会の問題として、描こうとするもの」と記されている。



「こぎとゆかり」原稿

今までこぎの世話をしているせいで青春を謳歌できていないと思っていたゆかりが、こぎを老人ホームに入れようとする父・治郎に対して、猛烈に反対するシーン。

コラム ミヤコ蝶々

水木洋子とミヤコ蝶々

水木は、映画「にっぽんのお婆あちゃん」(1962)、ドラマ「豆菊はんと雛菊はん」に出演した蝶々から博多人形が贈られている。その際の手紙には、2作品でお世話になったことへの感謝の気持ちが綴られる。その後も蝶々は、ドラマ「わたしは力モちゃん」(1969)などの水木作品に出演した。



ミヤコ蝶々『女ひとり』

1966(昭和41)年 鶴書房

ミヤコ蝶々自身の半生を綴った自伝。水木が跋文を書いている。



ミヤコ蝶々から贈られた博多人形

現在も水木邸で見ることができる

【ミヤコ蝶々】みやこちようちよう

本名 日向鈴子(ひゅうがすずこ) 1920~2000
東京市日本橋区(現・東京都中央区日本橋)生まれ

1948年に南都雄二(なんとゆうじ)と夫婦漫才コンビを結成。「宝塚新芸座」に参加し、大阪道頓堀の中座を拠点に活躍した。その後、一人舞台を始めてから長年公演を行い、ひとり語りの話芸で上方芸能界を引っ張る存在となった。

水木洋子が描く〈家〉という呪縛

「甘柿しぶ柿つるし柿」

「はまなすの花が咲いたら」

「甘柿しぶ柿つるし柿」では、「家」に縛られ自分の思うような人生を歩めない三女が、実家の旅館を切り盛りすることで小さな喜びに気づく姿が描かれる。

「はまなすの花が咲いたら」でも、主人公が家族に裏切られながらも最後は自分の小料理屋でいきいきと働く姿が描き出されている。

女性は家を守ることが当たり前のなか、「家」に縛られながらも、働いて自立することで幸せを見出すことができるという水木の考えは、脚本に反映されている。

ええ、氷が解けて、花がまた咲くのは、はまなすだけで、人間は、二度と咲かない

「はまなすの花が咲いたら」

甘柿しぶ柿つるし柿

1969年10月15日～1970年1月28日放送

(全15回) TBS

演出 宮武昭夫・砂原幸雄・井下靖史

出演 池内淳子・児玉清・黒柳徹子 ほか

東京・九段下の割烹旅館「浪川旅館」を営む女性ばかり5人家族の浪川一家を中心としたドラマ。母・波と四姉妹、長女と次女それぞれの家族らを合わせた一家とその周りに起こったさまざまな出来事を描く。

はまなすの花が咲いたら

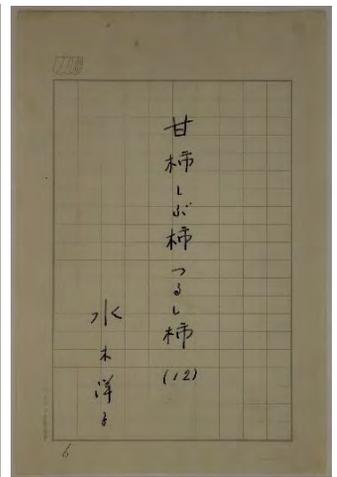
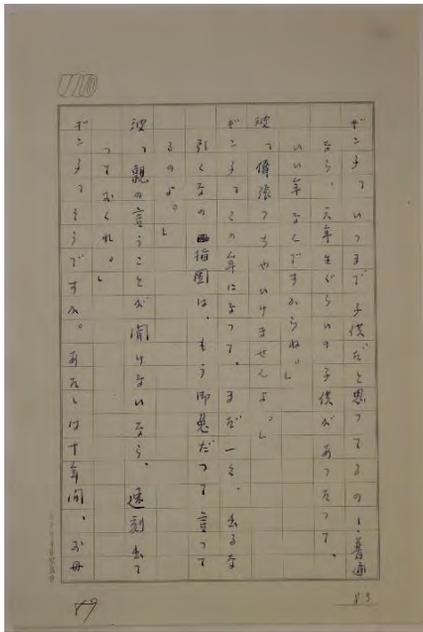
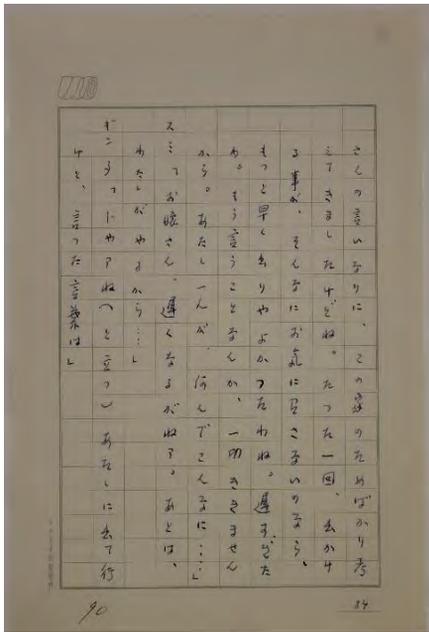
1981年11月10日～1982年4月20日放送

(全24回) TBS

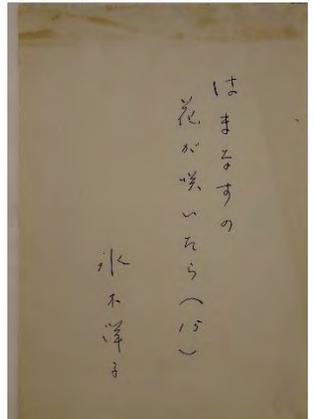
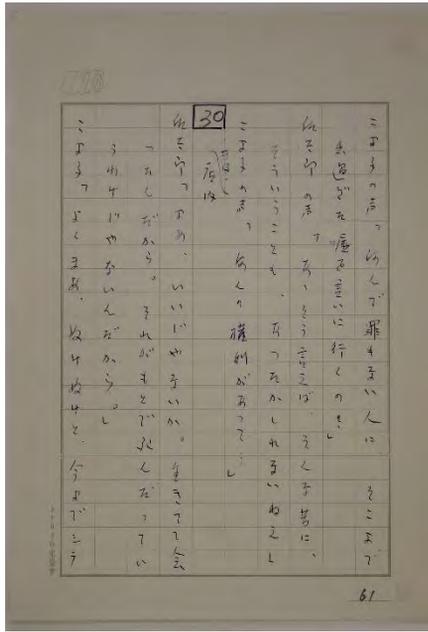
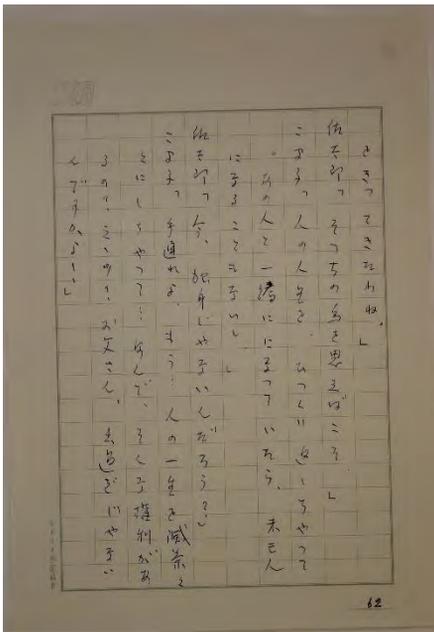
演出 脇田時三・淡野健

出演 池内淳子・北林谷栄・小野寺昭 ほか

柔道場と整骨院を経営する福山武光の妻、こま子は1年前に武光と死別。柔道場は義弟、整骨院は副院長にそれぞれ経営が引き継がれた。こま子は姑の世話をし、福山家を支えていたが、義姉たちはこま子にきつく当たる。それを知ったこま子の父は不憫に思い、再婚の話を持ち掛ける。



「甘柿しづ柿つるし柿 第12回」原稿
 主人公・ギン子が、いつまでも自分を子供のように束縛してくる母・波に対して怒りをぶつけるシーン。



「はまなすの花が咲いたら 第15回」原稿
 かつて、こま子の婚約者に対して、父・佐太郎が別れるよう脅していた。そのことを知ったこま子が父を問い詰めるシーン。

水木洋子が描く〈女性と仕事〉

「もず」

「みかんきんかん夏みかん」

女性は手に職をつけなければならないと、たびたび主張している水木の作品には「働く女性」が多く登場する。

「もず」では「男に寄りかかることでお金を稼ぐ母」と「美容師として自分の技術をいかして働く娘」という、対照的な働き方をする二人の女性が登場。

「みかんきんかん夏みかん」では「自立して働く楽しさを覚える主人公」や「自立し働くことが必要だと気が付く母」が登場し、女性が働くことの意義が描かれている。

私は私で、自立できるかどうか。行き方を試していますの。

「みかんきんかん夏みかん」

もず

1960年1月7日～1月28日放送（全4回） NTV

演出 せんぼんよしこ

出演 杉村春子・丹阿弥谷津子・賀原夏子 ほか

幼少期以来会っていなかった母・すが子が働いている新橋の小料理屋まで松山から会いに来たさち子。しかし変わってしまった母の姿を見て黙って帰る。すが子の病気をきっかけに二人で住むことになったが、互いに愛情はあるがすれ違いで口論になる。

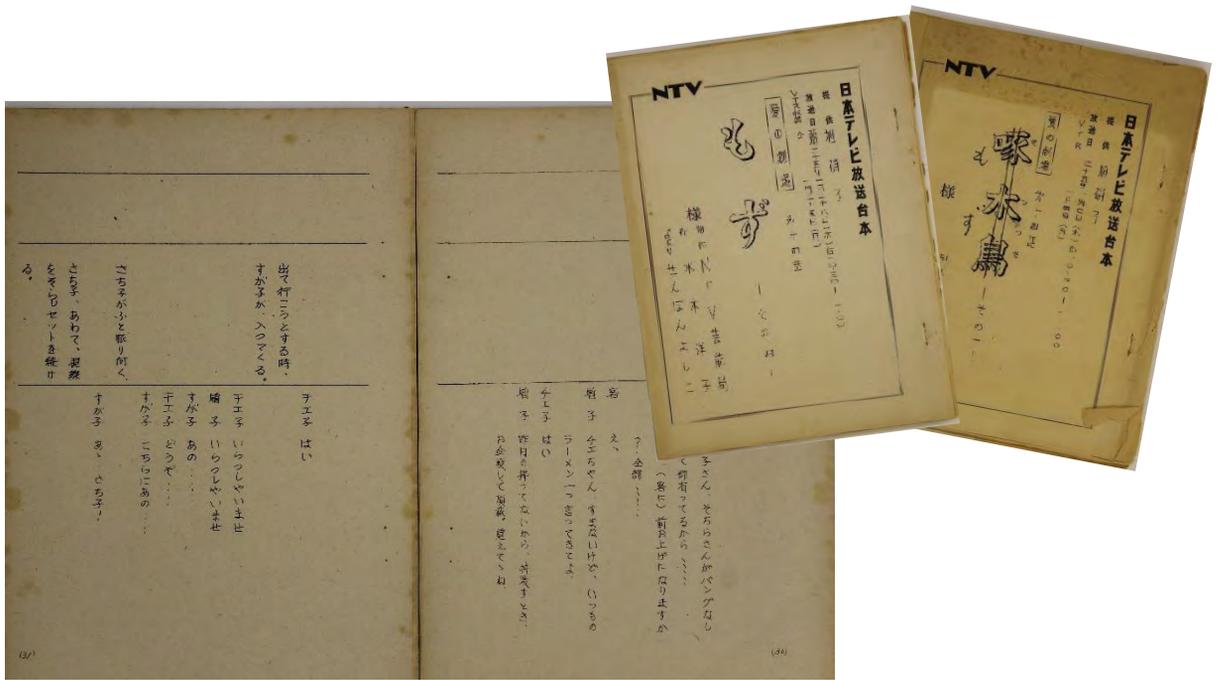
みかんきんかん夏みかん

1971年1月20日～7月14日放送（全26回）TBS

演出 堀川敦厚・佐藤虔一

出演 池内淳子・三益愛子・黒柳徹子 ほか

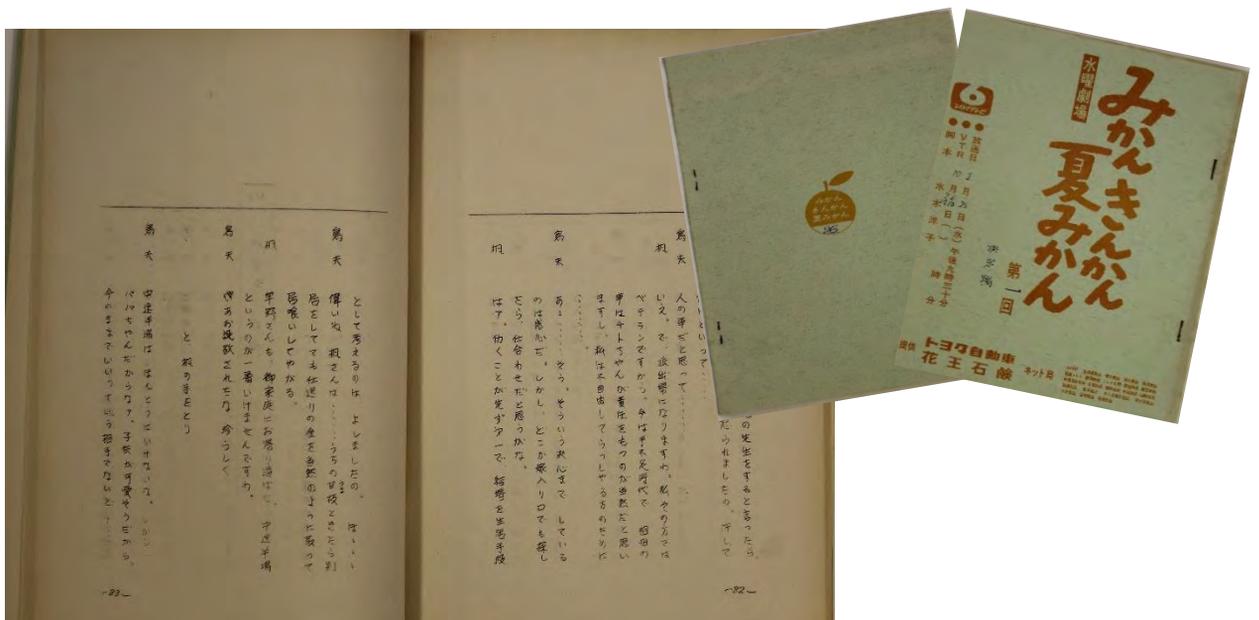
喫茶併設でモ子菓子を製造販売する「井野田」は、すでに両親のいない兄妹が経営。その2階の窓づたいに行き来する隣家には、互いに血のつながらない祖母、嫁、孫娘が住む。姻戚関係でつながった2軒の騒動とロマンスが描かれる。



「愛の劇場 もず その2」台本

1960(昭和35)年放送 NTV

見習いとして美容室で働いているチエ子を描いたシーン。このころには女性に門戸が閉ざされていた職業や新しく登場した職業にも女性が進出するようになった。水木作品では「みかんきんかん夏みかん」などにも、1957年に国家資格となった美容師として働く女性が描かれている。



「水曜劇場 みかんきんかん夏みかん 第23回」決定稿台本

1971(昭和46)年放送 TBS

今後の人生に不安があった楓が、派出婦(家政婦)として働くことを決意したことを伝えるシーン。

「女よ家庭に帰れ」だとか「女に学問は必要ない」とか「生意気になる」とか、つい最近まで言われてきたことである。まして、戦前は校長が朝の訓示で「女は良いお母さんになること」を理想としていた。私も、なるほど良い話だと思った。ところが教室で、杉山先生は校長と違うことを言った。

「女が自立する力をもたないで、どうして子供を守り、家庭を守れるのだろうか。早い話が、もし夫に倒れられた場合、未亡人になった場合、代わって子供を育成する力をもっていなければ、どうするのだ。昔の女は、すぐ身売りとか、人の困い者とか、身体を金に変えるよりほか、能力がなかった。あなたがたは女であっても必ず身につく技能を一つもっていないければ、いいお母さんにだってなれません」というようなことを語った。私は強い共感を覚えて、一つだけできることを持ちたいと望むようになった。

「めぐりあい『女の自立』教えられた」毎日新聞夕刊（1979〈昭和54〉年3月26日）

第四章

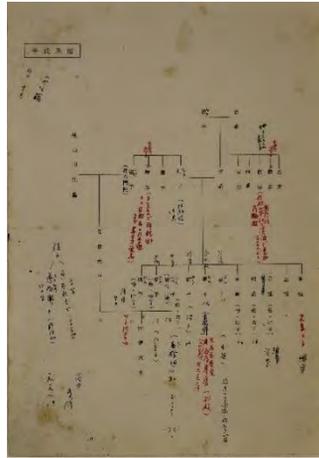
水木洋子のエッセンシャル

そのほかのテレゴッドリママ

「女人平家」

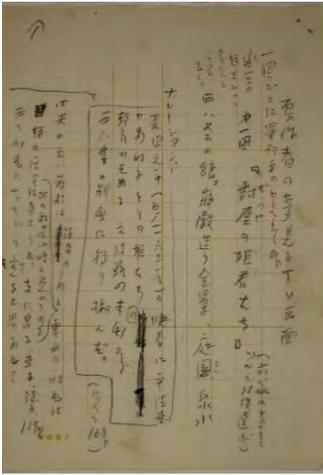
当初、「女人平家」は別の脚本家が担当する予定だったが、原作者の吉屋信子(よしや のぶこ)の指名により水木が脚本家に起用された。

この作品の時代考証を担当していた林美一(はやし よしかず)は、12回目あたりから脚本と現場の事情にずれが生じたため、水木の脚本を書き換えていたと記している。



平氏系図

平家の家系図が記された印刷物。別名や年齢、人物像が書き込まれている。



「原作者の夢見るTV画面第1回対屋の姫君たち」草稿
ドラマ「女人平家」の第1話「対屋(たいのや)の姫たち」の草稿。「吉屋信子」の印字がある原稿用紙を使用している。原作につけられている目次から題名を選ぶように、というメモ書きがある。

女人平家

1971年10月7日～1972年2月17日放送
(全20回) ABC

原作 吉屋信子

演出 西河克己・松本明・大熊邦也・田中徳三

出演 吉永小百合・佐藤慶・有馬稲子 ほか

「平家にあらずんば人にあらず」と呼ばれた平家隆盛期、清盛(きよもり)の妻(とき)とその6人の娘たちを中心に、平家興亡の歴史の裏に秘められた女性たちの数奇な運命を描いている。



「連続テレビ映画 女人平家 その1～4」台本
1971(昭和46)年放送 ABC

コラム 吉屋信子

水木洋子と吉屋信子

水木は新聞連載中だった吉屋信子の「安宅家(あたかけ)の人々」を連続ラジオドラマとして脚色、演出も手がけている。翌年の1952年に公開された映画版では脚本をつとめた。

『女人平家』の刊行となり、テレビで御指名を再三戴き、私は、吉屋さんのほんとうに義理がたい誠実なお気持ちに何としてもこたえなければと思ったのである。
二十年も昔のことを覚えていて下さって、是非と電話で何回も折衝されるのに、私は他の脚本家が数本既に書いているのを、はねのける苦痛で、ためらうのだった。局が依頼した他の脚本を退けて、私にと言われるのには、何か吉屋さんのこのお仕事への打ちこみ方のただならぬものを感じて、ともあれ放送は異常に大きなスケールで開始された。

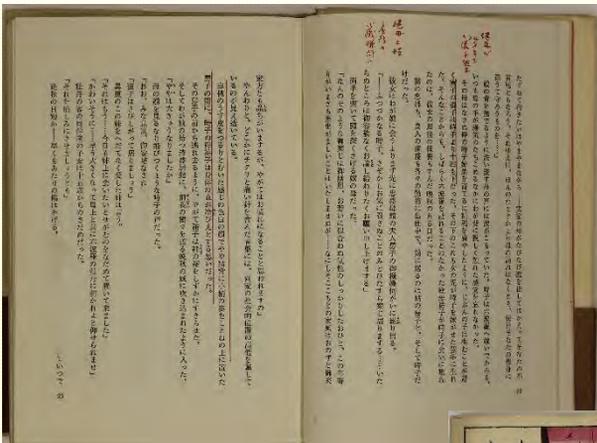
「ラジオと映画とテレビで」吉屋信子全集 9

(朝日新聞社 1975(昭和50)年)月報3

【吉屋信子】よしゃのぶこ

1896~1973
新潟県新潟市生まれ

1916年から連載された「花物語」などの少女小説で人気を博した。女性向けの家庭小説や大奥ブームを生んだ「徳川の夫人たち」(1966)など、女性史を題材にした小説、随筆と幅広く執筆活動を行った。



吉屋信子『女人平家 前篇・後篇』

1971(昭和46)年 朝日新聞社

「週刊朝日」1970年7月10日号~1971年10月8日号掲載。

傍線や波線、書き込みや角の折り込みなどが多数みられる。

コラム 水木洋子出演番組

水木はテレビドラマの脚本を書いていただけではなく、時には出演者としてもテレビに関わっていた。出演した番組は脚本家としての経歴や脚本を書くにあたっての心構えなどをインタビュー形式で放送したものが多く。また、ワイドショーにもゲストとして出演している。



NHK番組「こんにちは奥さん」に出演する水木

私の町の神社の境内に、今夜からカラー・テレビが取りつけられるというわきをきいた。(中略)その日、私はテレビに出る約束になっていたのだが、丁度局から電話があって、きょうからこの番組はカラーでやることになりましたから、そのおつもりでという注意があった。

(中略)その電話の終りに、カラーでございますから白い衣服はやめていただきたいという注意があった。白はハレーションをおこし、白地に柄がとんだというたぐいのもも遠慮してくれというのである。

「カラー・テレビに出て」中部日本新聞朝刊(1959年8月9日)

テレビドラマから映画へ

ドラマ

おとうと

1958年6月6日～6月20日放送(全3回)

NTV

原作：幸田文

演出：池田義一

出演：香川京子・津川雅彦・加藤嘉



映画

おとうと

1960年11月1日公開

大映

原作：幸田文

監督：市川崑

出演：岸恵子・川口浩・田中絹代

水木脚本の映画は1976年にも上映。また、映画化だけにとどまらず、舞台やラジオドラマにもなった。

あぶら照り

1964年7月1日放送

CX

演出：岡田太郎

出演：京マチ子・野川由美子・藤村志保



甘い汗

1964年9月19日公開

東京映画／東宝

演出：豊田四郎

出演：京マチ子・佐田啓二・桑野みゆき

「あぶら照り」は京マチ子のテレビドラマ初出演のために書かれた作品のため、映画化の際も主演は京マチ子だった。

その他にドラマから映画になった作品には「もず」がある。

映画からドラマになった作品については水木洋子テレビドラマ年譜をご覧ください。

ドラマ上映会作品

五月の肌着

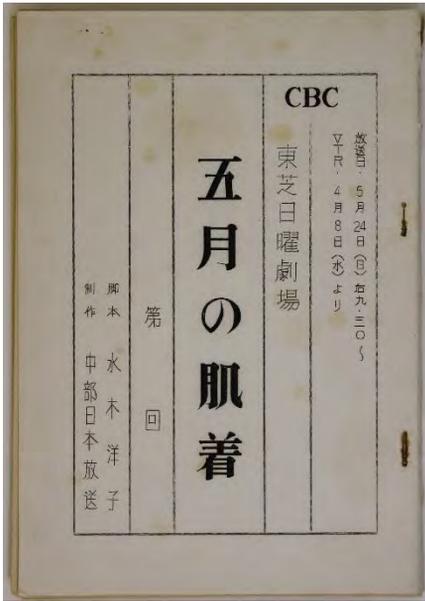
1970年5月24日放送 CBC

演出 住田明美

出演 池内淳子・中村翫右衛門・高橋長英

日本民間放送連盟賞テレビ娯楽番組部門優秀賞

母親がわりの姉が家につかぬ弟のためにつくす姉弟愛の
美しさを描いた物語



「東芝日曜劇場 五月の肌着」台本
1970(昭和45)年放送 CBC

東芝日曜劇場

昭和四十九年度芸術祭参加

灯の橋

放送
昭和49年11月19日(日)
21期 ~ 21期55分

脚本 水木洋子
制作 中部日本放送
制作協力 山陰放送

灯の橋

1974年11月10日放送 CBC

演出 住田明美

出演 中島久之・栗原小巻・江守徹

芸術祭テレビドラマの部大賞

凄惨な事件の生き残りの少年と引き取った眼科医の
心を通わす物語

「東芝日曜劇場 灯の橋」台本
1974(昭和49)年放送 CBC

女が職場を去る日

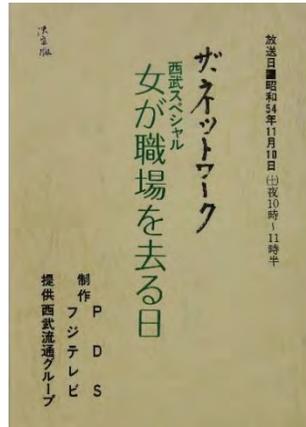
1979年11月10日放送 CX

原作 沖藤典子

演出 久野浩平

出演 倍賞千恵子・山本学・松村達雄

家庭と職場のはざまに立つて苦悩するキャリアウーマンの物語



「ザ・ネットワーク 西武スペシャル
女が職場を去る日」決定版台本
1979(昭和54)年放送 CX



「西武スペシャル 女が職場を去る日」
パンフレット
1979(昭和54)年
西武流通グループ総合企画室

ドラマ上映会スケジュール

<p>7月23日・25日・29日 9月10日・12日</p> <p>10:30 女が職場を去る日 (80分) 13:00 ごぎとゆかり (48分) 14:00 なぎ (84分)</p>	<p>7月24日・26日・30日 9月11日・13日</p> <p>10:30 出会い (75分) 13:00 灯の橋 (48分) 14:00 五月の肌着 (48分) 15:00 竜馬がゆく〈第16話〉 (45分)</p>	<p>9月2日～6日</p> <p>はまなすの花が咲いたら 第1話～24話 (各45分) ※1日に5話ずつ上映 (最終日のみ4話) 10:30～13:00～</p>
--	---	--

場所：生涯学習センター 2階 ベルホール
当日先着42名 申込み不要 無料

*会期中に行われたイベントのスケジュールです

展示資料一覽

*一部資料は前・後期で展示替えを行いました。
*資料は全て当館所蔵です。

自筆資料

- 「なぎ」取材手帳
- 「幼い二人」取材メモ
- 「竜馬がゆく」第16回「構想メモ
- 「星の夜のテラス」登場人物メモ
- 「豆菊はんと雛菊はん」箱書き
- 「なぎ」原稿
- 「テレビ指定席 幼い二人」決定稿
- 「竜馬がゆく」取材手帳・メモ帳・関係人物取材メモ
- 「星の夜のテラス」原稿
- 「こぎとゆかり」原稿
- 「甘柿しづ柿つるし柿 第12回」原稿
- 「はまなすの花が咲いたら 第15回」原稿
- 「原作者の夢見るTV画面 第1回」「對屋の姫君たち」草稿

台本など

- 「石中先生行状記 ハイヒールの巻」台本
- 「テレビ指定席 純愛物語」台本
- 「甘柿しづ柿つるし柿」セット図面
- 伊馬春部「太郎行くところ 第45、46回」台本
- 「なぎ」第二稿台本
- 「テレビ指定席 幼い二人」台本
- Priz Italia 1966 Osanai Futari The Little Ones」台本
- 「竜馬がゆく」台本
- 「ドラマ 星の夜の雨傘」台本
- 「長時間ドラマ 出会い」最終稿台本
- 「星の夜のテラス」台本
- 「東芝日曜劇場 こぎとゆかり(仮題)」台本
- 「新年特集ドラマ 豆菊はんと雛菊はん」決定台本
- 「水曜劇場 みかんきんかん夏みかん 第1・23・26回」決定稿台本
- 「愛の劇場 もず その2・4」台本
- 「連続テレビ映画 女人平家 その3・4」台本
- 「東芝日曜劇場 五月の肌着」台本
- 「東芝日曜劇場 灯の橋」台本
- 「ザ・ネットワーク 西武スペシャル 女が職場を去る日」決定版台本

取材資料

- 昭和36年6月梅雨前線豪雨 災害調査
- 36・6梅雨前線豪雨水害記録文集 濁流
- わたしはひとりになった 伊勢湾台風子どもの記録
- 瓢湖の白鳥 写真はがき

書簡

- 水木洋子宛水木洋子宛吉屋信子書簡 1971年9月7日消印
- 水木洋子宛和田勉書簡 1968年3月19日消印
- 1974年9月28日消印
- 吉屋千代書簡 1973年7月28日消印

愛用品など

- 原稿用紙
- 拡大鏡
- 文鎮
- 着物
- 煙草入れ
- 「なぎ」 第17回芸術祭受賞記念 絵皿
- 「女人平家」コレクターズDVD

図書・雑誌

- 週刊昭和 昭和28年 通巻29号
- 画報現代史 戦後の世界と日本 第14集
- キネマ旬報 臨時増刊 テレビ大鑑
- 週刊文春 第14号
- 週刊ヤングレディ 創刊記念号
- May Kiss No.85
- グラフィック 通巻第192号、200号
- 司馬遼太郎 『竜馬がゆく 1・5』
- ミヤコ蝶々 『女ひとり』
- 吉屋信子 『女人平家 前・後篇』
- 「西武スペシャル 女が職場を去る日」パンフレット

水木洋子のテレビドラマ作品一覧

放映年	タイトル	回数	制作局	主な出演	出演者	備考
1957年 (昭和32年)	早春		NTV		桜井紗子、水谷良重、原塚昌子	
	石中先生行状記・馬車物語		NTV	池田義一	伊藤雄之助、原泉、左卜全	石坂洋次郎原作
	石中先生行状記・ハイヒールの巻		NTV	池田義一	木村功、田代信子、南田洋子	石坂洋次郎原作
1958年 (昭和33年)	愛情物語 13話 口紅		TBS	小坂昭夫	山本美津代、浦川麗子、泉大助	
	春の心 おとうと	3回	NTV	池田義一	香川京子、津川雅彦、加藤嘉	幸田文原作
1959年 (昭和34年)	路上の弾痕		NET	山本隆則	鶴丸龍彦、南原伸二、木下雅弘	
	風紋	9回	NHK	館野昌夫	里見京子、平幹二郎、長岡輝子	藤井重夫原作
1960年 (昭和35年)	はげやまちゃんちき		CBC	伊藤松朗	西川照三郎、西川右近、左卜全	
	早春		NHK	泰山英世	木暮実千代、磯村みどり、青柳美枝子	
1961年 (昭和36年)	もず	4回	NTV	せんぼんよしこ	杉村春子、丹阿弥谷津子、賀原夏子	
	にぎりえ		NET	山本隆則	山田五十鈴、北村和夫、織田政雄	樋口一葉原作
1962年 (昭和37年)	純愛物語		NHK	古岡三千郎	矢代和雄、十朱幸代、中村雅子	
	早春		NET	植野堯弘	月丘夢路、新井茂子、神宗根美樹	
1963年 (昭和38年)	日々の平安		CBC	千野栄彦	下元勉、中北千枝子、黛ひかる	
	漁(なぎ)		NHK	館野昌夫	中村芝翫、宮口信二、長岡輝子	芸術祭テレビドラマの部 奨励賞
1964年 (昭和39年)	砂の上		NHK	館野昌夫	越路吹雪、森光子、淡島千景	
	おかあさん	毎日放送	信太正行・第一制作	三益愛子、市川和子	水木原作「おかあさん」秋元松代脚色	
1965年 (昭和40年)	また逢う日まで		NET	後藤武彦	川津祐介、稲垣美穂子、柳永二郎	
	あふら照り		CX	岡田太郎	京マチ子、野川由美子、藤村志保	
1966年 (昭和41年)	ここに泉あり	5回	JOTX	岡本愛彦	下元勉、山内明、富士真奈美	水木原作「ここに泉あり」田井洋子脚色
	豆腐はんと雑草はん		NHK	前田達郎	京マチ子、ミヤコ蝶々、山吹まゆみ	NHK テレビドラマ脚本賞
1967年 (昭和42年)	おかあさん		NHK	中山克	鈴木光枝、加藤忠、佐々木愛	水木原作「おかあさん」田村幸二郎脚色
	朝顔	4回	CX	岡田太郎	京マチ子、河内桃子、久慈あさみ	
1968年 (昭和43年)	純愛物語		ABC	兼田敏行	前田信明、刈屋ヒデ子、北沢典子	水木原作「純愛物語」寺田正義ほか脚色
	幼い二人		NHK	都成潔	森崎俊雄、寺田農、小林妙子	
1969年 (昭和44年)	また逢う日まで	2回	CX	岡田太郎	吉永小百合、加藤剛、中村伸郎	水木原作「また逢う日まで」浅川清道脚色
	唐変本		NHK	梶谷典子	木暮実千代、小川知子、沢田雅美	
1970年 (昭和45年)	春らんまん	6回	CX	岡田太郎	新珠三千代、北村和夫、中原早苗	水木原作「婚期」松木ひろし脚色
	竜馬がゆく	52回	NHK	辻元一郎(雨-和蘭)	北大路欣也、高橋英樹、三田佳子	司馬遼太郎原作
1971年 (昭和46年)	わたしはカモちゃん	26回	CX	内野満寿男	江利チエミ、ミヤコ蝶々、前田吟	
	甘柿しぶ柿つるし柿	15回	TBS	宮武昭夫	池内淳子、北林谷栄、山岡久乃	
1972年 (昭和47年)	五月の肌着		CBC	住田明美	池内淳子、中村飯石衛門、高橋長英	日本民間放送連盟賞テレビ娯楽番組部門優秀賞
	星の夜のテラス		NHK	小林利雄	池内淳子、吉行和子、芥川比呂志	
1973年 (昭和48年)	みかんきんかん夏みかん	26回	TBS	柳川敦厚	池内淳子、三益愛子、牟田幹三	
	女人平家	20回	ABC	西河克己	佐藤慶、有馬稲子、吉永小百合	吉屋信子原作
1974年 (昭和49年)	火色	5回	NHK	広瀬英	北大路欣也、岩本多代	
	らっこの金さん		NHK	浦野進	菅井一郎、長岡輝子、森雅之	芸術祭テレビドラマの部 優秀賞
1975年 (昭和50年)	女王蜂と働き蜂		NTV	池田義一	池内淳子、有馬一郎、河原崎長一郎	
	出会い		NHK	和田勉	池田秀一、真野響子、富士真奈美	
1976年 (昭和51年)	つらつら椿	20回	NHK	岡本嘉佑	酒井和歌子、悠木千帆、うつみどり	
	ひょうたん通り	13回	YTV	戸国浩器	池内淳子、江本俊夫、岡佳也子	
1977年 (昭和52年)	星の夜の雨傘		NHK	和田勉	香山美子、高杉三枝子、荒谷公之	
	灯の橋		CBC	住田明美	栗原小巻、中島久之、江守徹	芸術祭テレビドラマの部 大賞
1978年 (昭和53年)	ヴィオンの妻		CX	小林俊一	山本学、十朱幸代、大滝秀治	太平治原作
	ゆく春		NHK	佐藤満寿哉	三益愛子、大空真弓、柳沢真一	
1979年 (昭和54年)	青いくちづけ	68回	MBS	鈴木晴之	沢たまき、佐久田修、柳生博	
	こぎとゆかり		CBC	住田明美	北林谷栄、大原麗子、佐々木すみ江	芸術祭テレビドラマの部 優秀賞
1980年 (昭和55年)	扇野		ANB	藤田時三	竹脇無我、栗原小巻、木村理恵	山本周五郎原作
	焚火	20回	NHK	岡本嘉佑	佐分利信、星由里子、関口宏	水上勉原作
1981年 (昭和56年)	女が職場を去る日		CX	久野浩平	信賞千恵子、山本学、松村達雄	神藤典子原作
	もず	20回	NHK	椿恭造	池内淳子、竹下景子、渡辺文雄	
1982年 (昭和57年)	愛が薫かれるとき	4回	NHK	佐藤満寿哉	丘みつ子、轟夕起、久米明	澤地久枝原作
	米点・愛と憎しみの家		YTV	富本壮吉	紺野美沙子、三田佳子、中村敦夫	三浦綾子原作
1983年 (昭和58年)	はまなすの花が咲いたら	24回	TBS	藤田時三	池内淳子、北林谷栄、小野寺昭	
	田園調布の玉の輿、但し小結オニキ四付き		ABC	大冢清	中条きよし、手塚理美、池波志乃	水木原作「婚期」速水アキ脚色

TVは時間芸術といえます。時間芸術は、その時代、現代なら現代の中に生活している大衆の中に自分があるところ、ほんとうのドラマが書けるのだと思います。

「作家の顔・水木洋子氏」 『テレビドラマ』ソノレコード（1963（昭和38）年1月）

令和7年度市川市文学ミュージアム企画展
昭和のテレビドラマ 水木洋子のエッセンシャル

【会期】

2025（令和7）年7月19日（土）～
9月15日（月・祝）

本展覧会の開催にあたり、ご協力いただきました左記の方々および関係機関、また、ここに掲載することのできませんでした関係者の皆様に、深く感謝の意を表します。

協力者一覧（敬称略、順不同）

日本放送協会

放送ライブラリー

日向利一

渡辺陽子

瀬川稔

北大路欣也

坪内ミキ子

令和7年度市川市文学ミュージアム企画展
昭和のテレビドラマ 水木洋子のエッセンシャル展
市川市文学ミュージアム図録

2025（令和7）年12月20日発行

編集・発行 市川市文学ミュージアム

〒272-0015

千葉県市川市鬼高1丁目1番4号

市川市生涯学習センター2階

TEL 047-1320-3334

FAX 047-1320-3356

<http://www.city.ichikawa.lg.jp/cul06/litera.html>

企画展担当・図録編集

西村悠大

鵜沢織絵



